



ショートコメント

★★★

Data 2025-83

監督・脚本：マシュー・ランキン

出演：ロジーナ・エスマエイ  
リノサバ・ヴェヘディ  
ウセフィ／ピロー  
ズ・ネマティ／マシュ  
ー・ランキン

## ユニバーサル・ランゲージ (UNIVERSAL LANGUAGE)

2024 年／カナダ映画  
配給：クロックワークス／89 分

2025 (令和 7) 年 9 月 6 日鑑賞

テアトル梅田

### 👁️👁️ みどころ

邦題でも原題でも、タイトルだけでは何の映画かさっぱりわからないが、舞台が「ペルシャ語とフランス語が公用語となり、イラン文化が強く反映された架空のカナダ・ウィニペグ」と説明されたうえで、再度タイトルの意味を考えると・・・？

冒頭に見る、某小学校の授業風景は日本ではありえない強権的なもの（？）だが、本作ではなぜかそれもユーモラス！その他、ドリフターズの『8 時だヨ！全員集合』ばりの（？）“コント”のようなショート・ストーリーが次々と展開されていくので、それに注目！

もっとも『ユニバーサル・ランゲージ』と題された本作は、“島国ニッポン”に生まれ、“島国根性”が染み付いた日本人にはきっと理解が難しいだろう。何となくいい映画だとは思うものの、自分の理解が追いつかないため、残念ながら、本作は星 3 つ！

◆チラシに躍る「全世界 100 以上の映画祭を席卷！」、「世界の映画祭を席卷した珠玉のファンタジーが日本上陸」を見れば、こりゃ必見！もっとも、そのテーマは、チラシを見る限り、「これは、忘れられたお金をめぐる小さな勇気と心温かな人々の物語」、「この小さくて大きな世界で、私たちはみんな繋がっている。」。そして、ストーリーの核は「少女たちが見つけた、凍りついたお金 人々のぬくもりが溢れそっと溶けだしていく」だから、ちょっと意味不明・・・？そんな思いで本作のタイトル『ユニバーサル・ランゲージ』を改めて考えてみると、本作はきっとわかったようで、わからないような映画・・・？

◆本作の舞台は、「ペルシャ語とフランス語が公用語となり、イラン文化が強く反映された架空のカナダ・ウィニペグ」とされている。しかし、本作を観ただけでそれを理解できる日本人はいないだろう。そもそも、冒頭からスクリーン上に表示される文字は、「こりゃア

ラビア語？イスラム語？ペルシャ語？」と思うもので、サッパリわからない。ユーモラスな雰囲気が始まることはよくわかるのだが、少なくとも本作の舞台の説明や状況説明くらいは、ナレーションなり字幕なりでしてもらい必要があるのでは？

◆本作のストーリーは、ある小学校の授業風景から始まる。私は中国映画を初めて評論した『シネマ 5』で、中国映画の「学校特集」として『子供たちの王様（孩子王）』（87年）、『草ぶきの学校（草房子）』（99年）。『思い出の夏（王首先的夏天）』（01年）を取り上げた（『シネマ 5』267頁、270頁、273頁）。これらは、いかにも「これぞ中国映画！」といえる素朴さにあふれる素晴らしい作品だった。

それに対して本作冒頭に見る教室の先生は大いに「問題あり！」である上、「七面鳥に眼鏡を奪われたため、黒板上の字が読めない」と弁明する生徒に対して、「授業を受けず、立っている！」と命令するのはいかなるもの！

◆一見関連性のないさまざまなショート・ストーリーでつながっていく本作は、凍った湖の中に1枚のお札を見つける物語、廃墟を観光スポットとして紹介する奇妙なツアーガイドの物語等々、さまざまな“寓話”が次々に登場する。私は、そのそれぞれがドリフターズの「8時だよ！全員集合」のコントと同じように（？）ユーモアいっぱいであることは認めるし、舞台の設定等も興味深いものであることは認めるものの、残念ながら私には本作の良さをそれ以上理解することができない。

◆配給会社の公式サイトによると、本作の「監督は、カナダ首相の座を巡る権力争いを皮肉と遊び心たっぷりに描いたブラック・コメディ『The 20th Century』がベルリン、トロントなど主要な国際映画祭を始め、全世界で絶賛された実験映画監督のマシュー・ランキン」。また、「本作は切れ味のあるユーモアセンスと、アッバス・キアロスタミやジャック・タチなどの巨匠たちに強く影響を受けたキュートで詩的な映像が第77回カンヌ国際映画祭で評価され、監督週間部門としては史上初の観客賞を受賞。さらには、オスカー国際長編映画賞のカナダ代表にも選出される快挙を達成した」そうだ。

マシュー・ランキン監督の言葉によると、「この映画の主要なテーマの一つは“人に優しくすること”」だそうだ。そして同サイトには、「言語や文化、さらには自分と他人との境界も曖昧になって混沌とするウィニペグで、それでも相手と関わりあおうとする登場人物たちの姿勢は観る者の胸を打つことだろう。」と書かれている。

しかし、本作は私の胸を打つことはなかったので、残念ながら本作は星3つ。

2025（令和7）年9月8日記